

当報告の内容は著者の著作物です。

イスラームとは何か

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 飯塚 正人

イスラームを知る：その思想と現実、タイの実態から
(東南アジアのイスラーム (ISEA)第6回公開セミナー)

平成22年11月13日(土)午後1時より午後16時

大分県別府市立命館アジア太平洋大学 (APU キャンパス) 大学院棟 (H202)

【報告要旨】

イスラームとは、アッラーを唯一の神として崇め、アラビア半島のマッカに生まれた商人ムハンマド(570年頃～632年)を神の使徒と認める信条と、それに基づく生活規範などを含む信仰・思想・行為のすべてを意味する。わかりやすく言えば、神の命令とされるイスラーム法に従って生きていればこの世で共同体が繁栄し、あの世で個人も天国に入る一方、命令に逆らった場合にはこの世で没落、あの世でも地獄を見ると信じている人々の宗教、ということになるだろうか。ちなみに、イスラームに帰依する人々をムスリムという。

イスラームの根本聖典『クルアーン』は、預言者ムハンマドが神から受け取った命令(啓示)をそのままの形で、まったく人間の手を加えずに記録したものとされ、創造と破壊を司る偉大な神がただひとつであること、この世の終わりにやって来る最後の審判についての警告、天国と地獄の描写、人類と預言者の歴史、殺人・傷害・姦通・窃盗・強盗・飲酒・賭博・利子などの禁止、食べてはいけない食物の規定、女性の身だしなみ、両親や孤児への思いやり、公正な商売をする必要など、極めて広範な話題が盛り込まれている。

さらに『クルアーン』には、ムスリムが信じなくてはならない6つの信条(六信：アッラー、預言者、啓典、天使、来世、運命)と、能力の許すかぎり果たさなければならない5つの義務(五行：信仰告白、一日五回の礼拝、貧しい人々に施す喜捨、ラマダーン月における夜明けから日没までの断食、一生に一度のイスラーム暦12月のメッカ巡礼)も示されており、こうした「神の命令」を守ろうとしたせいで、ムスリム社会はどんなに遠く離れていようと、共通する一定の特徴を持つことになった。日本でイスラームのイメージ調査をすると、必ず上位にランクされる「奇妙な習慣」というイメージを誘発していると思われるムスリムの様々な習慣は、おおむねこの『クルアーン』に見られる神の命令に起因する。

他方、同じく日本人がイスラームに抱くイメージのなかで上位を占めている「攻撃的」については、歴史的にムスリムとライバル関係にあったヨーロッパが産み出した偏見の色が強い。イスラームは戦争を否定しないものの、古典的なイスラーム法規定におけるジハード理論は、「イスラームの家(支配地)」を拡大しようとする、いわば「拡大ジハード」

と、「イスラームの家」に対する侵略者を撃退する「防衛ジハード」とに大別される。拡大ジハードの理論はかつてのイスラーム帝国による大征服を可能にしたが、その遂行には理論上カリフの命令が必要とされるため、今日の文脈ではまったく問題にならない。1924年にトルコで廃止されて以来、カリフ制そのものがこの世に存在しないからである。

これに対し、防衛ジハードはカリフの在不在に関係なく、すべての成人ムスリム男子の義務とされる。武装した異教徒が「イスラームの家」に現れた場合、すべての成人男子は侵略者を撃退すべく、生命・財産・言論などを捧げて抵抗しなくてはならない。この理論に従えば、1300年以上にわたって「イスラームの家」であったパレスチナに建国されたイスラエルは、まごうことなき「侵略者」となる。これが、ハマースやヒズボラがイスラエルに対して「テロ」を続ける理由である。一方、1979年にアフガニスタンに侵攻したソ連軍も「侵略者」と見なされ、各地から集結した義勇兵と現地のゲリラ勢力によって撃退された。

さらに防衛ジハード思想の浸透は、1991年の湾岸戦争後もサウディアラビアに駐留し続ける米軍まで「侵略者」と見てジハードを試みるムスリムの出現すら促すことになる。彼らの代表がウサーマ・ビンラーディンである。80年代末に彼が組織した義勇兵組織アルカーイダには、パレスチナやイラクの惨状、またボスニアやコソヴォ、チェチェン、南部フィリピン、新疆ウイグル自治区などで独立を目指すムスリムへの攻撃に心を痛めた青年たちが結集した。彼らにとって20世紀末から21世紀初頭という時代は、世界中で同胞が虐殺され続けた時代に他ならない。彼らの闘争論理を理解するには、こうした「状況」の理解が不可欠と言える。

実際、「同胞が虐殺されている」という感覚は、多くのムスリムに共有されている。世界中で同胞が虐殺されていると考えないで済むくらい劇的な状況の変化がないかぎり、彼らのジハードは終わらない。防衛ジハードを遂行するのに誰かの司令が必要なわけではない。「虐殺をやめさせるためのジハード」という思想さえ共有されていれば、司令などなくとも戦闘は遂行される。テロ組織さえ潰せば問題が解決するといった類の話ではないのである。